

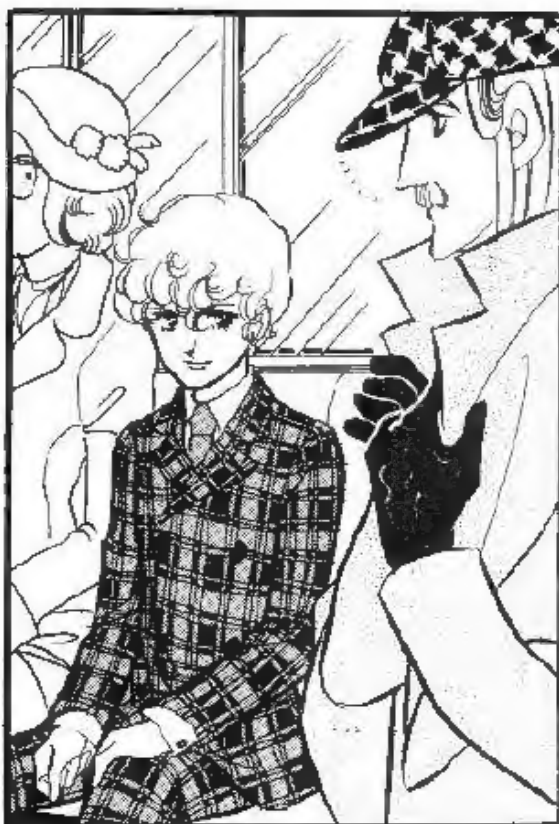
# ホームズの帽子





1934年  
ロンドン

わあ  
そのあ  
そのバ  
ス







髪を  
切りたまえ  
ジョン・  
オービン！



だってね  
髪の毛の長い  
人間の方が  
體感が  
働くって  
いうから

ジェルソン  
社長から  
新刊の  
企画を聞いて  
おまえを  
使おうと  
思ったんだ

マック  
編集長



オービン  
年はすぎる  
ぞ 考えろ



クレイパス  
がイゾルデ  
に毎日  
白バラを  
贈ってる  
そうだと  
ぞ



今は夢路の  
扉を閉じぬ

古い  
時間は  
もうすぎた

いかゞが  
オービンさん

けっこう  
なかなかいい



たとえば  
部屋の  
くらがり  
に

不思議な  
氣配を  
成したり



血のさら  
ならべて  
魔物を  
呼んだり

五方  
の形  
陣の中





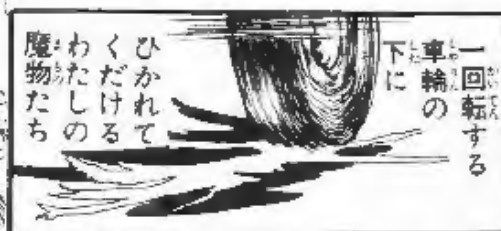
わたしは  
男の人の仕事に  
モンクを言う気は  
ないわよ

ただ髪の長い夫は  
いやだつていうのよ

みことな  
白いバラ  
ですこと  
お嬢さま

ええ  
ケイシイ・  
クレイバス  
からよ

ところで  
今夜は  
お客さま  
ですって?



許せ  
わたしは  
イゾルデと  
結婚するぞ！



お嬢さま!!  
お客は  
マック編集長に  
クレイバスに

ジョン・  
オービン  
ですよ！



クレイバス  
！  
きみも  
来てたのか

これは  
めずらしい  
ジョン・  
オービン！

ネス湖へ  
怪物さがしに  
行ったと  
聞いてたが！



なんですってえ!?

しかも  
髪を切って  
きてます!!



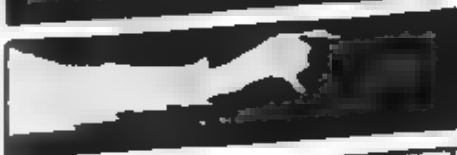
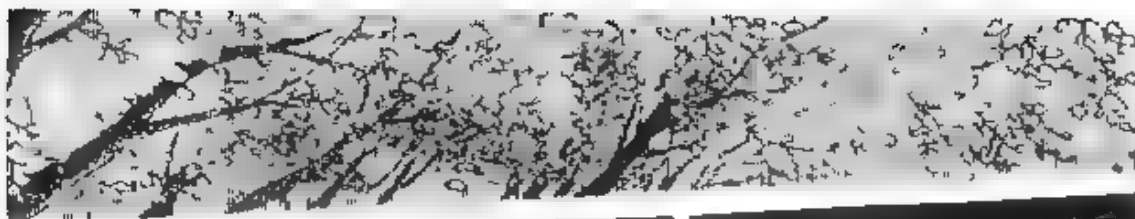








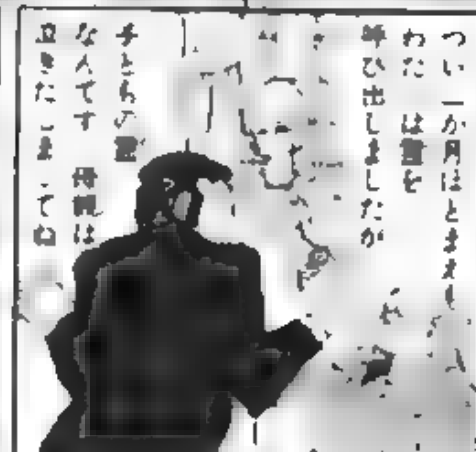
ムムッ  
クソッ













それぞれの家の  
柱のかげに  
森の泉に  
古い城に

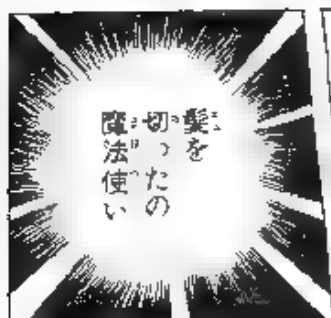
どれほどの  
小妖精が  
魔物が  
かくれてるか

人びとが  
いかに  
それらを愛し  
伝説として  
伝えているか

そしてぼくが  
なにかの  
妖精に  
出会っても

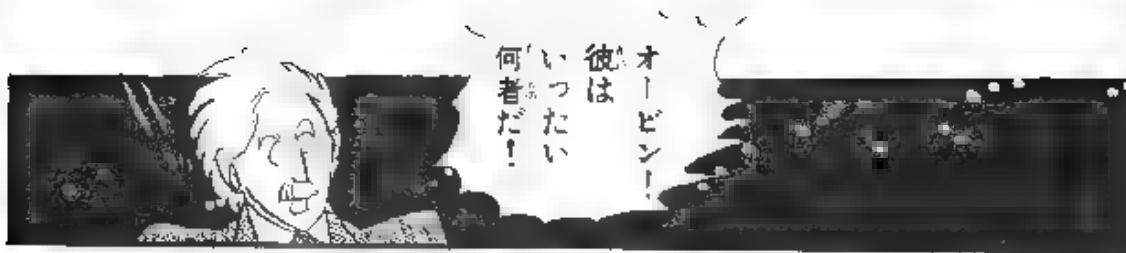
だからぼくも  
その存在を  
愛し  
信じられる

この寒い  
国の人ひとの  
たれもがそれを  
愛し  
さがして  
るのでは  
ないか

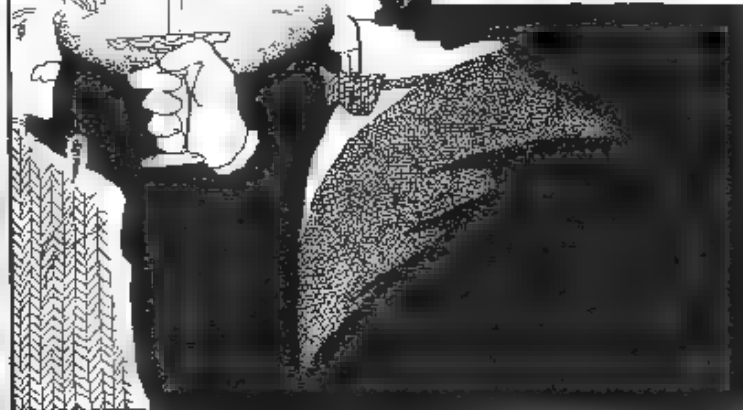
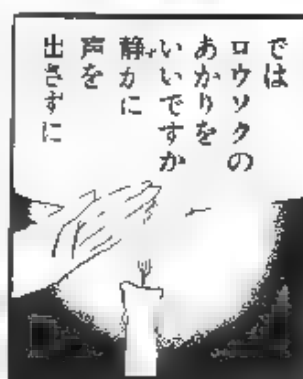


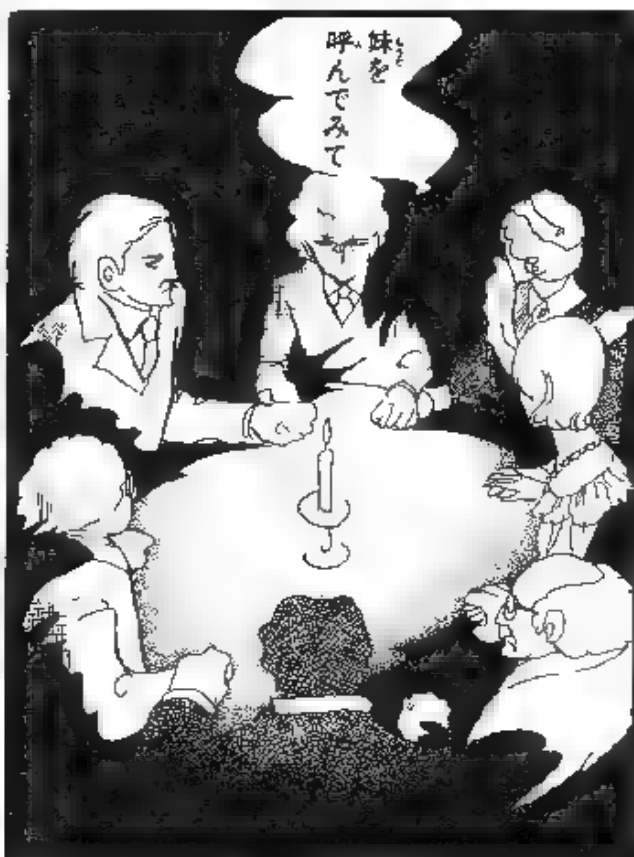
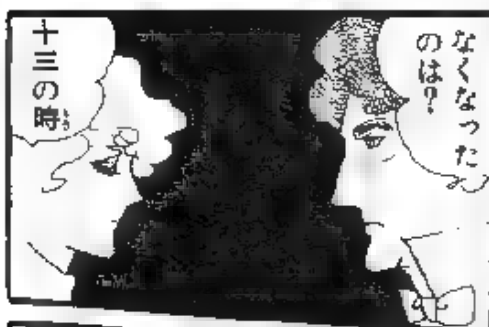
ぼくもまた  
伝説にたくして  
そつと後世へ  
伝えたいと  
思つて  
きたのだ

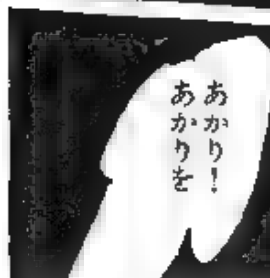
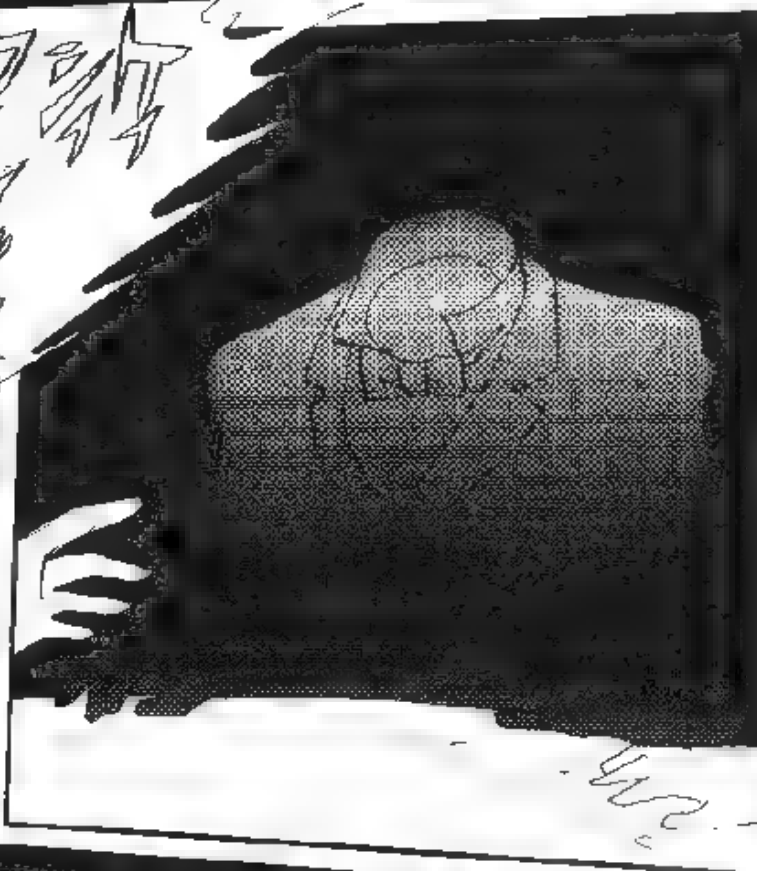
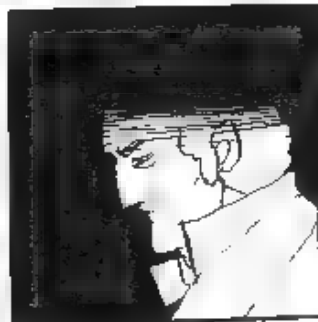
見せ物に  
しつたり  
大衆に  
さらしたり  
せずに





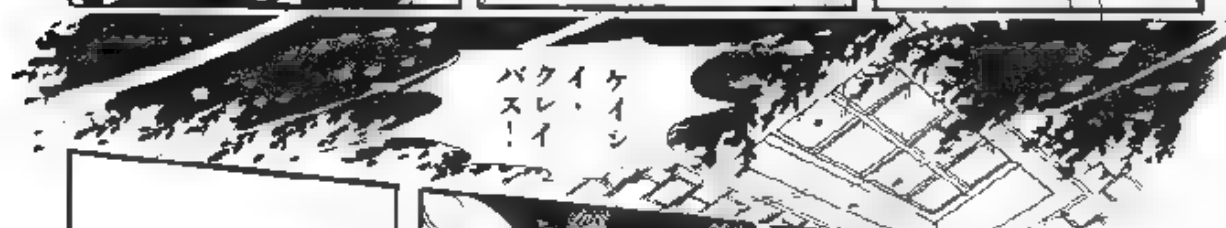
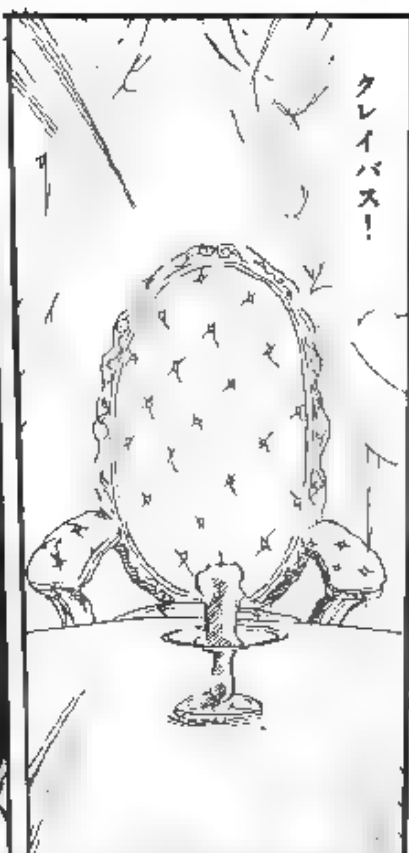




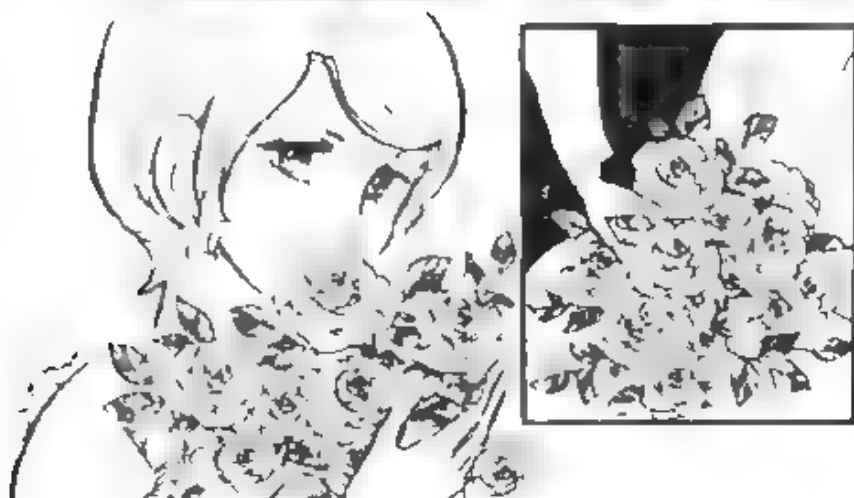


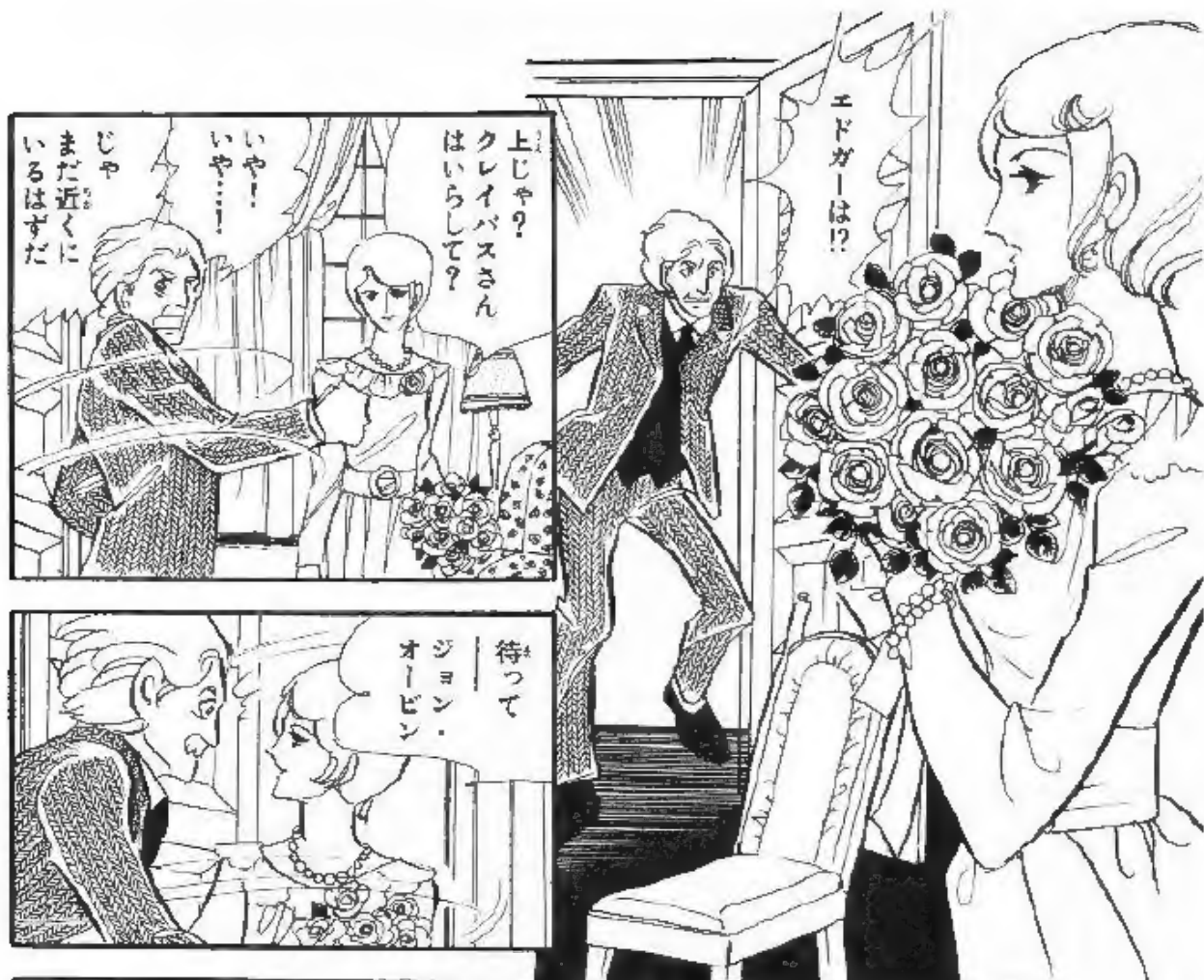
あかり！  
あかりを





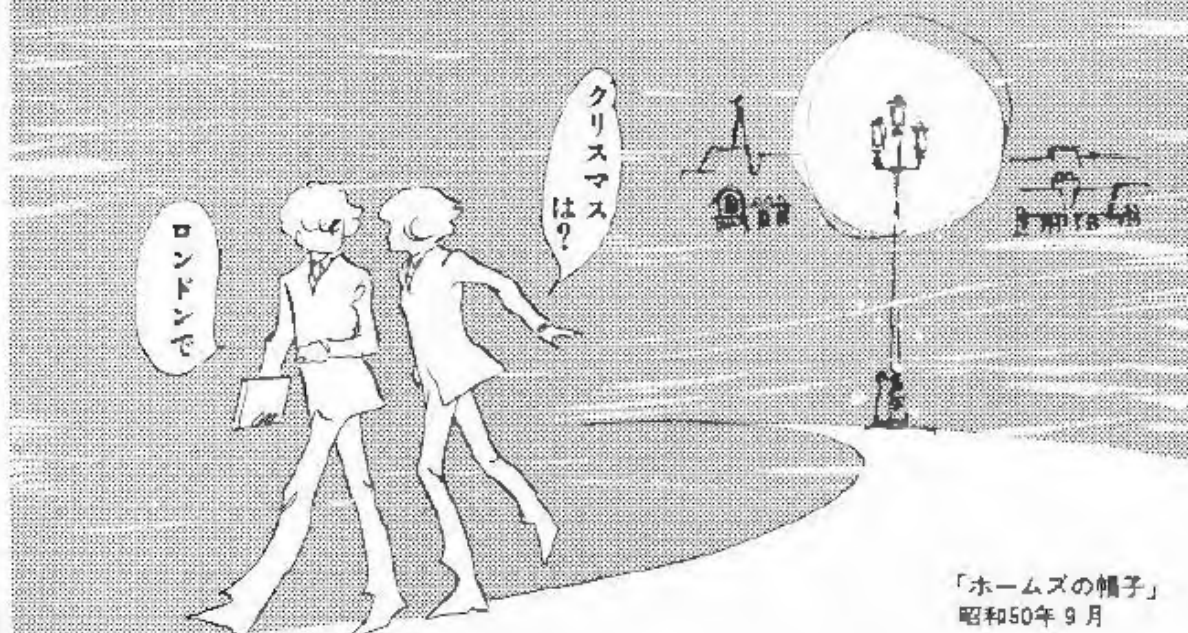








魔法使いの  
目をしてる





ポールの一族 第二卷——終わり——